

第 章

建学の精神・教育理念、
教育目的・教育目標

第 章 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

第 1 節 建学の精神・教育理念

1. 本学の創立

大阪音楽大学短期大学部は、大阪市南区塩町（現、中央区南船場）において1915年（大正4年）10月11日に開校された私立大阪音楽学校（旧称）から、1951年に学校法人大阪音楽短期大学となり、1965年に開学した。それは、大阪音楽学校の創立者永井幸次の半生を懸けた事業であった。従って、創立者永井の大阪音楽学校建学への想いが理念として大阪音楽大学短期大学部の根底に流れている。永井学長の持論である「音楽人は教養が与えられねばならない。教養の深い人の音楽は高雅である」という、人間性の涵養の修得とともに音楽知識を含めた一般教養の修得、社会人としての自己形成を伴った修練・研究・創造であることを建学の精神としている。この精神は、本学における教育理念を支え、現在まで受け継がれている。また同年、10月15日には授業が開始され、この日を創立日と決めている。この開学に合わせて、建学の精神を音楽教育の現場により一層生かされるように、再度次の理念が掲げられた。この精神・理念は本学法人が設置するすべての教育機関が共有するものであり、各教育機関が示す目的・目標の基本理念となっている。

新しい音楽の発生地をめざして

永遠之ノ學校ガ大大阪否ナ關西音樂ノ中心トナルベキ發達ヲ遂ゲ
終ニ世界音樂並ニ音樂ニ關連セル諸般ノ藝術ハ之ノ學校ニヨッテ統一サレ
新音樂新歌劇ノ發生地タランコトヲ祈願スルモノナリ

—創立者 永井幸次先生の開学理念より—

この理念の示す処は、まさに「新しい音楽の発生地（発信地）をめざして」という事に集約される。関西の音楽の中心地にとどまらず、ロシア・イタリア・フランス等の西洋音楽全体を教育範囲にもち、しかも日本の伝統音楽も含めて、西洋音楽と日本音楽とを比較対照する独自の音楽研究を目指し、新しい音楽の創造を試みようとした。地理的な視野を越えて、芸術を総合する場、音楽を創造する場という歴史的地平の彼方に位置する永遠の中心点を大阪音楽学校に求めようとしていたのである。この遠大な理念は、永井にとっては決して空疎なものではなかった。それは音楽教育の現場において、社会人としての自己形成を含め日々創造されていくものであった。

この建学の精神及び理念は、永井の50年間に亘る大学構築の時代を経て、永井以後の大阪音楽大学短期大学部40年の歴史の中でも、一瞬たりとも忘れられたことはなかった。音楽芸術における発生地でありたいという想いだけは、誰もがいつでも共有してきた唯一のものであった。本学が示してきた教育理念、また改善・改革はすべてこの精神に基づいており、発祥地であり続ける事を目的として、進化する科学技術と音楽の融合を追究する、音楽研究所

の設立、教育・研究を広く社会に公表する拠点としてのオペラハウスの建設等、数々の改革・改善が行われてきた。現在、本短期大学部では、音楽への視野を広げ、「社会で活躍できる短大」として各種マネージメント系教育や、西洋音楽のみでなく舞踊を取り入れたカリキュラムの充実化など、演奏技術だけでなく新たな音楽文化を創出できる次代の音楽人材の養成（音楽文化の送り手養成）をおこなっている。音楽をより広い視点でとらえるつまり「音楽を拓ける」というこの教育理念は、創立90周年事業のテーマにもなっている。これらもまた、本学が現在の社会情勢に対応し、発祥地であり続けるための方策であるといえる。現在、建学の精神・教育理念は大学案内や大学公式ホームページへの掲載、入学式に於ける学長式辞などによって学生、教職員に周知されている。

本節の23に、私立大阪音楽学校の設立以降の、本学における教育理念の変遷及び事業概要をまとめる。

2．本学の歴史（概要）

1926年（大正15年）に大阪市東区味原町（現、天王寺区味原本町）に移転、1948年（昭和23年）には大阪音楽高等学校、1951年（昭和26年）に大阪音楽短期大学が開校された。1954年（昭和29年）に、豊能郡庄内町野田（現、豊中市庄内幸町）に移転し現校地となっている。1958年（昭和33年）には大阪音楽大学が開校され、同時に大阪音楽高等学校が附属音楽高等学校へと改称された。また、翌年の1959年（昭和34年）には大阪音楽短期大学を大阪音楽大学短期大学部へと改称された。附属音楽高等学校は1981年（昭和56年）に閉校となったが、1967年（昭和42年）には附属音楽幼稚園、大学専攻科、短大専攻科（1995～1999年はセミナー制）、1968年（昭和43年）には大学院音楽研究科が開設された。1978年（昭和53年）には短期大学部（第一部）が200名から300名に、音楽学部（第一）の定員が150名から225名に、それぞれ入学定員が変更された。1987年（昭和62年）には短期大学部（第二部）の募集を停止し、1992年（平成4年）には同二部を廃止し、大阪音楽大学短期大学部（第一部）を大阪音楽大学短期大学と改称した。

2000年（平成12年）には短期大学部専攻科の作曲専攻・声楽専攻・器楽専攻が学位授与機構の認定を受けた。2004年（平成16年）4月1日から短期大学部音楽科に作曲・声楽・器楽各専攻に加え新たに設置されたジャズ・ポピュラー専攻の4専攻となった。

3．建学の精神・教育理念に基づく事業概要

創立者永井の建学の精神及び理念は90年間の歴史の中で繰り返し語られてきた。またいつの時代の本学便覧にもその言葉は掲げられてきた。歴代学長の言葉にも、建学の精神に基づき社会状況に対応すべき教育理念が含まれていた。

永井以後、大阪音楽大学短期大学部の40年間は永井の教育理念を時代の変化に合わせて修正してきた歴史でもある。第二代学長である水川清一は、増加する学生数に対して音楽教育の困難さを自覚していた。そこで、A～F号館の学舎を建設し、大小の教室、レッスン室、練習室の充実を行い、続けてG、H号館、箕面学舎の建設が行われた。遠隔地からの女子学生の受け入れ体制を整えるべく寄宿舎も設置された。1980年開設の音楽研究所の基礎となる

音楽文化研究所の設置、1967年開設の付属音楽幼稚園開設の為の準備、1980年開設の音楽博物館の基礎となる楽器資料室の設置、付属図書館の充実化が行われた。また本節2. 本学の歴史（概要）にて示したように、大学院設置へと至る教育機関の設置が行われたのもこの時期である。このように教育環境の充実が図かれる一方、1966年には日本のオーケストラとして戦後初の訪台となる演奏旅行を行い、中国文化学院と姉妹校となったのをはじめ、1967年には韓国国立ソウル大学校音楽大学との合同演奏会を両国にて開催した。これら海外事業は1979年の韓国、啓明大学校芸術大学のオペラ視察行へと受け継がれた。以後、1988年の韓国国立國楽院のシナウィ（器楽合奏）演奏団との交流等の海外事業が展開されている。

教育面においては、水川は学生に人格形成の必要性を強く示し、より広く音楽的教養が身につく教育を重視した。これは発生地となることを断念したわけではなく、むしろ音楽芸術を社会に広く媒介する新たな担い手を作りだそうとしたのである。それは個々の学生達がその音楽的教養を深く身につけることによって、永井のいう「関西音楽の中心地」となることに比重を移したといえる。そして、水川は1966年に音楽専攻という独創的な制度を作りだし、音楽芸術の媒介者として、調和の取れた豊かな音楽教養を身につけた人格形成を目指した。その後、1976年には、基礎の確立と個の充実を指標にして、本学の基本姿勢の再確認を行なった。それが学生の個別指導の徹底とカリキュラムの多様化であった。

第三代学長である田中喜一は、短期大学部の社会的（自己）認識と責任を強調し、豊かな人間性の陶冶と音楽芸術の修練・研究・創造を教育理念として示した。水川以上に田中は短期大学部の教育理念を「音楽を通じて良き社会人を育成する」ことへとシフトさせていった。また、教育を支え前進させていく研究機関の充実とその成果を、開かれた大学として社会に開放すべき拠点として、1980年にK号館が開館され、翌年、これまでの音楽文化研究所と5研究室が統合し、資料・実験の2部門各3研究室からなる音楽研究所が設置された。これと同時に、研究助成の制度化が行われた。同館では、開かれた大学の理念実践の場として、公開講座にも活用されている。

最新機器を使用した音楽教育の可能性を追求するとともに、一般教育の細部にまで配慮したカリキュラムの編成、個別指導における能力伸長の徹底化、アンサンブルの活性化をはかるとともに、欧米の各種音楽教育システムの視察から教育方法に関する知見を深めた。1984年には、合理化と社会との強調をはかることを目的とした事務機構の再編成が行われ、1987年からは“大学ベース”とも言うべき形態での音楽活動の拠点となることを目的とした、日本初の本格的オペラハウスの建設が開始された。

1988年に第四代学長になった永井譲もまた「自分の音楽の土台を自分で築くこと」という学生の自立を促した。また音楽教育の指標を、演奏家など実践的音楽家、教員など音楽の理解・伝達者の両者教育に置き、多様な科目を開講し専門科目以外の教育に柔軟性を持たせた。このことは入試制度改革にも通じている。1989年にはオペラハウスが竣工し、音楽運動の拠点としての活動を開始するとともに「オペラハウスを持っている大学」としての活動が開始された。さらにO号館、学生サロン「ぱうぜ」を建設し、学生生活、教育環境の充実をはかった。

1998年に第五代学長になった西岡信雄は、新世紀を担う音楽文化を創出できる人材、また

よき送り手が育つ拠点としての教育機関、つまり「社会で活躍できる短大」を目指すことを提案した。それに伴い、音楽専攻を廃止し、音楽科作曲専攻、声楽専攻、器楽専攻とし、新たにジャズ・ポピュラー専攻を新設した。それは、古典だけでなく、同時代的な音楽の発信基地として、同時代的な音楽の送り手をつくらうとする試みの第一歩であった。また2005年度は、本学創立90周年ということもあり、90周年事業の一環として「音楽を拡げる」を掲げ、韓国の啓明大学校音楽・舞台芸術大学との国際交流を本格的に開始するとともに、日独交歓ジャズ・コンサート、日韓中伝統音楽演奏会等、数々の記念事業の開催を企画した。この記念事業を通して、これまで以上に音楽に対し広い視野で取組み、国内のみでなく広く海外で音楽文化の創出、またよき送り手として活躍できる人材を育てたいという意識を教職員、さらに学生の間で共有することとなった。舞踊系実習科目がカリキュラムに導入されたこともまた、「音楽を拡げる」と同時に新たな音楽教育の方向性を示したと言える。

4. 現在の音楽科の構成

図表1に学科・専攻・コースの構成と学則に定める入学定員・収容定員を示す。

図表1 2002～2004年度の音楽科の構成

2002・2003年度の学科・専攻・コース		入学定員 (人)	収容定員 (人)	
音 楽 科	作曲専攻	10	20	
	声楽専攻	50	100	
	器楽専攻	ピアノ	90	180
		管楽器		
		弦楽器		
		打楽器		
	音楽専攻	ミュージカル	150	300
		ポピュラー・ヴォーカル		
		声楽		
		ピアノ		
電子オルガン				
吹奏楽				
ジャズ				
ギター				
合 計		300	600	

2004年度の学科・専攻・コース		入学定員 (人)	収容定員 (人)		
音	作曲専攻	10	20		
	声楽専攻	50	100		
楽	器楽専攻	ピアノ	150	300	
		管楽器			
		弦楽器			
		打楽器			
科	ジャズ・ポピュラー専攻	ジャズ	90	180	
		ポピュラー			ヴォーカル
					インストゥルメント
		ミュージカル			
電子オルガン					
合計		300	600		

2002～2004年度の専攻科・専攻		入学定員 (人)	収容定員 (人)
専攻科	作曲専攻	2	2
	声楽専攻	5	5
	器楽専攻	8	8
合計		15	15

第2節 教育目的・教育目標

1. 各専攻・履修コースの教育目的・教育目標

教育目的・目標を学生及び教職員に伝え、共有する手段としては、毎年度初めに配布される幾つかの冊子等（例えば、大学案内）がある。又、ホームページにおいてもその内容を見ることができる。新入生に対しては入学直後の新入生ガイダンス、在学生に対しては選択系ガイダンス（第1 Semester修了時）にて説明を行っている。また、広報「Muse」、教職員学内報「大音あれこれ」等を通じ、全体的な目標等について理事長の見解が定期的に述べられ周知されている。本組織は「社会で活躍できる短大」を目指しておりその為の教育理念として、音楽文化を創出できる次代の音楽人材の養成（音楽文化の送り手養成）を目指して、従来以上に広い視点で音楽教育を行うことを示している。これは創立90周年事業のテーマ「音楽を拓げる」にもなっている。以下に本学の教育理念に基づいた各専攻・コースの教育目的・目標を示す。いずれの教育目的・目標も、広義の「音楽を拓げる」を实践する為に必要不可欠となる専門分野の技術・知識の向上を示している。このように本学の建学の精神は、

短期大学の教育理念を経て、より具体的な各専攻・コースにおける教育目的・目標へと反映されている。

作曲専攻

作曲専攻は、自由な発想で “音によって自分を表現したい人” のための「創造の場」となっている。作曲、対位法、和声の3つのレッスンを重点的に学び技術と感性を身につけることを目指し、作曲と和声の基本から、時代のニーズに応える人材を育てることをカリキュラムに反映させながら授業を展開している。

声楽専攻

声楽は身体が楽器であり、音楽的な声を目指すことが声楽の基本といえる。単に声がきれいと言うだけではなく、曲を形にまとめる知性と努力により「歌える人」を育成している。発声法の基礎技術と、日本、イタリアおよびドイツ等の歌曲練習をとおして歌唱法の基本を身につけている。仲間と協力して作品を仕上げていく機会が多いため、自然に学生同士の信頼感や協調性が養われる事も特徴となっている。このような人間的魅力を育てていくことも本専攻の特徴といえる。それぞれの個性にあった曲を選んでレッスンから、歌う楽しみや魅力を伝え、音楽的基礎能力を高め、歌う技術と共に言葉に対するセンス、内面的な表現力も同時に学修している。

器楽専攻 ピアノ

技術および音楽解釈を学び、個性を生かしながら演奏の基礎能力を高める。

ピアノ演奏をもう一度基礎から見直し、音楽を多面的にとらえることを学んでいる。そのことによって、音楽に対する理解力が著しく伸び、入学時とは異なる音作りができることを目的・目標としている。また、それぞれの個性を生かしながら「歌える音楽性」を養われるようになっている。レッスンと並行した「ピアノ基礎講座」では、音楽全般についての常識を学び、グループごとの研究、発表を行っている。討論を重ねる中で自分らしい個性を演奏に生かしていく事を学修している。

器楽専攻 管楽器

演奏技術の習得と楽曲の演奏解釈上の知的な理解力を養い、演奏を通して多様な音楽体験を積み重ね、指導者、演奏者としての能力を身に付けることを目的・目標としている。特に個別指導であるレッスンは勿論のこと、吹奏楽やオーケストラのような大規模な合奏から室内楽、同属楽器による大合奏などを通してアンサンブル指導に注力している。

器楽専攻 弦楽器

演奏技術の習得と幅広い音楽の理解力を養い、アンサンブルを通して豊富な演奏経験を積み、指導者及び演奏者としての能力を身に付けることを目的・目標としている。

個別指導であるレッスンは勿論のこと、特にオーケストラのような大規模な合奏から室内楽、弦楽器同士による大合奏などを通してアンサンブル指導に注力している。

器楽専攻 打楽器

各種の打楽器を総合的に学び、さまざまな形のアンサンブルにおいて、色々な要求に応えられる技術の習得と音楽感覚を養うことを目的・目標としている。

個別指導であるレッスンは勿論のこと、特に吹奏楽やオーケストラのような大規模な合

奏から室内楽、打楽器のみによる大合奏（合奏A）などを通してアンサンブル指導に注力している。

器楽専攻 箏（2005年度より「邦楽」）

邦楽演奏の優れた技術と西洋音楽にも精通する深い知識を養う。伝統の継承と新たなものを生み出すことを目標とする。また、三弦を基礎から学ぶ。

高い演奏技術と邦楽のみならず西洋音楽の広い知識を備えた邦楽演奏家・指導者の育成を目指し、伝統を重んじながら邦楽を広い視野で捉え、幅広く学べるカリキュラムが編成されている。古典から新曲まで、また洋楽との融合などを学び、さらに精神・道徳面での邦楽の伝統を自然に学びとることができるようになっている。

ジャズ・ポピュラー専攻

1992年、新カリキュラム実施にあたり短期大学の音楽専攻では、ジャズ・ポピュラー、ミュージカルなどの新分野を導入し、その歴史も10年を越え、2004年度から新たに「ジャズ・ポピュラー専攻」としてスタートすることとなった。本専攻内の各コースにおいて共通することはそれぞれの専門分野における演奏家を目指すことは勿論、音楽をバックアップする業務に関わることも可能とする素地を養うことを念頭に置き、社会が必要とする人材の育成とより質の高い音楽を求めて特色のあるカリキュラムを編成している。

ジャズ・ポピュラー専攻 ジャズ・コース

ソロ、コンボ、フルバンドなどさまざまな演奏形態の実習を通してジャズ奏法を習得する事を目的・目標としている。レッスンや合奏の授業を通して、ジャズの演奏解釈やアドリブ演奏を学び、レッスンではジャズが初めての人から、すでに高い演奏力を持つ人まで、学生の到達段階と学習目標に合わせたマンツーマンの授業を行っている。

ジャズ・ポピュラー専攻 ポピュラー・コース

ポピュラー音楽の特徴である“口承伝承形式”による音楽の理解に重点を置いている。

ポピュラー音楽のテクスチャーを理解し、ポピュラー音楽に関する学問的内容と職業的内容を学習し、専門的な音楽知識や技術の修得及び学生個々の個性や感性を活かした自由な音楽的表現力や音楽想像力を持つ演奏家と音楽産業や音楽ビジネスについての実践的知識を習得した総合的プロデュース能力を持つ人材の育成を目的・目標としている。

2004年4月の組織変更に伴い、従来の「ヴォーカル」の教育に加え、新たに「インストゥルメンタル」としてポピュラー音楽に使用される主だった楽器も加え、総合的なポピュラー音楽の教育を目指している。

ジャズ・ポピュラー専攻 ポピュラー・コース ヴォーカル・クラス

歌うことを通じて個々のアイデアで自己を表現し、曲の持つ強い精神的メッセージを聴き手に伝えることのできる歌手の育成と、音楽産業に従事できる能力や知識を持つ人材の育成を目的・目標としている。

外国曲を通じて、ポピュラー歌唱の基礎項目や音楽表現法を習得し、洋楽や邦楽の優れた作品のカバーやオリジナル曲の制作もおこないます。

ジャズ・ポピュラー専攻 ポピュラー・コース インストゥルメント・クラス

楽器演奏を通じて個々のアイデアで自己を表現し、曲の持つ強い精神的メッセージ

を聴き手に伝えることのできる演奏家の育成と、音楽産業に従事できる能力や知識を持ち、ポピュラー音楽を総合的にプロデュースする能力を持つ人材育成を目的・目標としている。

ジャズ・ポピュラー専攻 ミュージカル・コース

ミュージカルの歌・ダンス・演技の修得を専門授業の中心とし、ミュージカルについて、一般的知識を得るとともに、ミュージカルをつくり演じるための基礎技術を学んでいる。ミュージカルは、多くの人々の共同作業で成り立っており、歌・ダンス・演技の技術修得はそれ自体が楽しみであると同時に、忍耐と根気も必要である。卒業後、社会人としての良好な人間関係の持ち方や、柔軟な発想、多角面なものを見方をミュージカルの専門授業の過程で身に付けることを目標としている。

ジャズ・ポピュラー専攻 電子オルガン・コース

編曲法、作曲法、アンサンブル、即興演奏などの演習を通して、電子オルガンの特性を生かした表現を追求する。コースを横断しジャズ・コースとのセッションやポピュラー・ヴォーカルの伴奏を試みる中から新しい可能性を発見することなどを通して、音楽への広い視野と幅広い能力を身につけた演奏家及び指導者の育成を目指している。

音楽専攻（2004年度から学生募集停止）

本専攻の声楽コースは声楽専攻に、ピアノ・コースは器楽専攻のピアノ・コースに、吹奏楽コースは器楽専攻の管楽器・弦楽器・打楽器コースに、ギターコースは器楽専攻の弦楽器コースに含まれる。

第3節 短期大学部専攻科の理念・目的と個性・特色

1. 大阪音楽大学短期大学部専攻科の設立

大阪音楽大学短期大学部専攻科（以下、本文中では短大専攻科と略す）として現在の実技を主体とする教育体制が確立したのは2000年からであり、同年には本専攻科の作曲専攻・声楽専攻・器楽専攻が学位授与機構の認定を受けた（2000年以前については、第1章第2節2. 本学の歴史（概要）を参照）。

2. 大阪音楽大学短期大学部専攻科の理念・目的

「新しい音楽の発生地（発信地）」になるべく、建学の精神の自己形成を伴った「修練・研究・創造」の場であることが重視され、教育課程において脈々と生きている。短大卒業後さらに1年間専門実技の研鑽・練磨を目標に専門分野の学習を深めると共に、専門外分野の科目も履修でき、幅のある人間形成を目指している。

3. 専攻科の個性と特色

短大専攻科では作曲、声楽、器楽の全専攻が「大学評価・学位授与機構」の認定を受けているので、短大卒業後専攻科において所定の単位を履修し同機構の試験に合格すると、「学士（音楽）」が授与されるのも短大専攻科の大きな特色である。

4. 専攻科の教育目標

短大専攻科には作曲専攻・声楽専攻・器楽専攻の3専攻がある。それぞれ短大卒業後1カ年の課程であり「専門実技の研鑽・練磨」の目標が達成出来るように、多くの機会を与えている。各種演奏会（ミレニアム・スチューデント・コンサート 2003・2004、ジュニア・カレッジ・アンサンブル・コンサート、ジュニア・カレッジ・ソロ・コンサート、新作展）のオーディションへの参加、コンサート・プロデュース、修了研究などがあり本人の意思次第でその専門実技の研鑽・練磨には十分な体制が準備されている。以下に各専攻における教育目的・目標を示す。

作曲専攻

作曲実技の研鑽を柱とし、作品分析を通じて楽曲の構成原理や音楽活動におけるコンピューターの利用法、デスクトップ・ミュージック（DTM）に対応した編曲法などを選択して学修することで、基礎の伸長と応用力の伸長を目標とする。

声楽専攻 声楽

短期大学で得た声楽技術を基礎とし、専攻科では個々の進捗状況と適性に応じ、個人レッスンという形態の中で、より柔軟で音楽性豊かな歌唱表現を追求することを目標とする。

声楽専攻 ミュージカル

「ミュージカル実技」を核として、卒業後の舞台活動に通じる高レベルの授業を展開すると共に、より多くの知識、理解力、感性を身につけるための人間教育を主眼とする。

声楽専攻 ポピュラー・ヴォーカル

卒業後ポピュラー音楽産業に従事することを前提に、歌唱力の向上と歌唱法発展、フレーズング、フエイク、ヘッド・アレンジ、ポピュラー音楽用語、ポピュラー音楽史など、ポピュラー音楽に関する知識の修得を目標とする。

器楽専攻 ピアノ・クラシック

専門実技の研鑽に主体を置き、演奏技術の向上、表現力の向上を目指す。また、アンサンブルに取り組むことも可能で、幅広くピアノ演奏を研究することを目標とする。

器楽専攻 ピアノ・ポピュラー

ポピュラーピアノの専門実技練達に主を置き、あらゆるシーンや幅広い奏法に対応できることを目標とする。個々の学生の方向性に応じたジャンルをより専門的に追及し、レパートリーの拡大を図る。

器楽専攻 電子オルガン

短期大学で学んだ理論と実践をさらに深く追求した内容のレッスンを行い、優れた編曲や完成度の高い演奏テクニックの修得を目標とする。将来、指導者を希望するものに対しては必要な項目の指導、実習も出来る。

器楽専攻 管・弦・打楽器

短期大学で修得した専門実技のさらなる研鑽を目指す。個々の進捗に応じた個人レッスンで演奏技術の向上、表現力の向上を図り、音楽家としての資質を高める指導を行なう。

器楽専攻 ジャズ

学生の学習目的により、ジャズ音楽の研究や演奏技術の向上を目指し、同時に将来音楽産業等に従事できるよう、高い知識、能力を身につけることを目標とする。

器楽専攻 箏

古典曲、新曲を通じて必要な知識と演奏技術、箏歌のあり方など、個性を生かしつつ専門的に指導を行なう。

本教育課程では、必修の実技に加え選択の実技科目を設定し、さらに学生自身の学習計画に応え専門外分野の履修も可能なカリキュラムを編成している。それに伴い、毎月1回定期的に開かれる「短期大学部専攻科運営委員会」において、学生の履修状況、選択科目履修者数等の調査結果を常時把握し検討を行っている。

5. 教育目的・目標の全学的共有化とそのための施策

「大阪音楽大学短期大学部専攻科規則」第2条により「専攻科は、短期大学の基礎の上にさらに深く、音楽に関する事項を教授し、その研究を指導することを目的とする」ことを、本組織における最も大きな教育目的・目標として定める。また、これに基づき、上記した専攻科ごとの教育目的・目標が定められている。

教育目的・目標を伝える手段として毎年7月初旬に発行される入試要項、4月発行の短期大学専攻科学生便覧、月発行の大学案内、年間9回発行の広報「Muse」（ミューズ）がある。又、ホームページにおいてもその内容を見ることができる。

6. 教育目的・目標の具現化に向けた施策

毎年11月に短大専攻科に在籍する学生達に対し、短大専攻科の組織体制や授業内容についてのアンケートを実施し、学生側からの意見を取り入れる努力を行なっている。

アンケート結果は短期大学部専攻科運営委員会に取り上げられ審議される。特に希望の多い事項については授業内容、担当教員、曜日、時限、選択人数、コマ数など実行可能かどうかの審議を行い、9月までに審議決定された事項は翌月の短大運営会議にて審議される。さらに翌々月の短大教授会、理事会の承認を経て次年度より実施される。

第4節 定期的な点検等について

1. 建学の精神や教育理念の解釈の見直しや教育目的・目標の定期的な点検

短期大学部自己点検・評価委員会や自己点検・評価統括委員会からの提言に基づき短期大学運営会議や短期大学部教授会において、毎年自己点検・評価を行い7年に2回自己点検・評価報告書を作成し、公表する。

建学の精神や教育概念の解釈の見直しは、自己点検・評価の機会を好機としてとらえ全学的に行う体制を進めることを、教授会、運営会議において確認している。